

ブロッホ:《パール・シエム》より 第2曲「ニーゲン」(ヴァイオリンとピアノ版)

エルネスト・ブロッホは、20世紀前半に活動したスイス出身の作曲家。ユダヤ民族という自らのルーツにこだわった作品を残した。1916年に渡米し、20年にはクリーヴランド音楽院の初代音楽監督に任命された。《パール・シエム》は23年の作品で、献辞には「わが母の思い出に」と記されている。その第2曲「ニーゲン」(ヘブライ語で「即興」という意味がある)は単独で演奏される機会も多い、民族音楽風のエキゾチックな旋律を用いた作品である。

ショスタコーヴィチ:ヴァイオリン・ソナタ op.134

ショスタコーヴィチのヴァイオリン作品の多くは、同世代のヴァイオリンの名手ダヴィッド・オイストラフを念頭に書かれている。本曲は、オイストラフ60歳の誕生日を祝うために1968年に作曲。全3楽章からなり、第1楽章アンダンテはソナタ形式。冒頭のピアノで弾かれる4度音程の上行音型が、全体の性格を決定する基本要素となっている。第2楽章アレグレットは、両端楽章と対照をなす、激しい音楽。最終楽章は、8小節のラルゴの序奏を経てアンダンテとなり、4度音程中心の主題が自由に展開される。難技巧を要するピアノとヴァイオリンのカデンツを経て最高潮を迎え、結尾のラルゴに入って静かに消え去るように終わる。

シルヴェストロフ:ヴァイオリン・ソナタ《追伸》

ヴァレンティン・シルヴェストロフは、キーウ生まれのウクライナ人作曲家。キーウ音楽院で作曲をボリス・リャトシンスキーに学んだ。第二次世界大戦後に前衛の作風で出発したが、1970年代以降は伝統的な調性や旋法も用いて独自の路線を歩んでいる。この《追伸》は、フランクフルト音楽祭の委嘱で90/91年に作曲された。3楽章からなり、第1楽章は、回顧的な抒情あふれるラルゴの序奏で始まり、様々な残響を生み出していく。第2楽章は、甘美な旋律がのびやかに歌い、第3楽章では、反響で満たされた空間のなかに、旋律のかけらが散りばめられていく。

ショスタコーヴィチ:ピアノ三重奏曲 第2番

ショスタコーヴィチの親友で音楽評論家のソレルチンスキーが第二次世界大戦中の1944年2月、疎開先で急逝した。突然の死に接し、当時構想していたピアノ三重奏曲を練り直し、亡友に捧げたのが本作。全4楽章からなり、第1楽章は、弱音器をつけたチェロがハーモニクスで静かに鎮魂歌をうたい始める。やがてモデラートに移ると、次第に熱を帯びていく。第2楽章は、ロンド形式の烈しいスケルツォ。パッサカリアによる第3楽章は、コラール風の和音の連なりが6回繰り返されるなか、ヴァイオリンとチェロが悲痛な旋律を奏する。切れ目なく続く第4楽章は、ヴァイオリンのピチカートによる第1主題が不穏な雰囲気をもたせ、ピアノによる力強い舞曲風の第2主題はユダヤ的で、グロテスクな色調さえ帯びている。最後は先行楽章からの引用も織り込んで、静かに曲を閉じる。